



獄舎報告單格

713
6471



第一 獄制貴國ニ行ハルハ一囚一室或ハ衆囚同室ノ

制歟若クハ西制ヲ混用アル歟「マコノチ」レ及ヒ「ク

フト」改進ノ説ヲ行ハルハナレハ之レヲ行ハルハノ

程度并ニ体裁如何又現用牢獄ノ種類并ニ各種牢獄ノ

囚徒平均ノ負數如何

答 一囚一室ノ制ナリ然レニ概テ一新以前ノ牢獄ヲ用

ユルガ故ニ現今ハ衆囚同室ナリ一牢獄ヲ十ハニ區畫シ

一囚百五十人ヲ内ル但未決檻禁獄檻ニ限リ早晚將サ

ニ改正着手セサル可カラズ衆囚同室ノ制タル其弊害

極メテ多ク喧嘩口論賭博及獄鴉其是等皆衆囚同室ヨ

リ生スルノ弊ト云ハザルヲ得ス加之衆囚中能ク悔悟

謹慎ナル者アルモ常ニ老黠ノ愚漢ニ煽動セラレ空シ

ク其發心ヲ棄抛スルニ至ル到底一囚一室ノ制ニ非サ

鶴田乙五

ルヨリハ懲治ノ本旨ヲ實際ニ行フテ十分ノ切驗ヲ觀
ルヲ能ハザル可シ現用牢獄ノ種類ハ
未決檻 既決檻 懲治檻 禁獄檻 病檻 女檻
六種ナリ

各種牢獄ノ囚徒平均ノ負數ハ
昨明治九年中ニ入監スル所ノ已決囚總員四千八百七
拾九人(平均一ヶ月四月二百六人)内女囚百二十拾三人(平均一ヶ月)
割ルルハ平均一ヶ月四月二百六人(平均一ヶ月)内女囚百二十拾三人(平均一ヶ月)
均十人(平均一ヶ月)内病ニ罹ルモノ千八百六十四人(平均一ヶ月)均十人(平均一ヶ月)
内牢死スルモノ百拾八人(平均一ヶ月)均十人(平均一ヶ月)同未決
囚入監スル高四千三百九拾四人(平均一ヶ月)均十人(平均一ヶ月)内女
囚百三十六人(平均一ヶ月)均十人(平均一ヶ月)内患者
牢死 人

懲治檻

禁獄檻

第二 統轄全國ノ獄制ヲ總轄スルノ長官アリヤ若シ之

レナクシハ管制ノ權何処ニ歸スルヤ又檢査ノ區域性
質及ヒ其實効如何

答 獄制ヲ專轄スルハ衙門ナシ管制ノ權内務省ニ歸シ
テ警視官之ヲ兼任ス檢査ノ區域ハ獄内ニ五ヶ所ノ交
番所アリ巡査ヲシテ昼夜間断ナク輪番セシム又夕囚
人就役中ハ工場ニ獄丁ヲ配置シテ怠惰ナル者ヲ戒シ
テハ警部ハ一時間毎ニ巡見査察シ獄司ハ一日一團警視
長官ハ一ヶ月或ハ二月毎ニ一團内務卿ハ一ヶ年ニ一
團ツ、巡視スルナリ

第三 獄吏ノ任官ノ法並ニ奉職ノ程規如何獄官ノ選任
ハ政治上持論ノ如何ニ関スルモノアル歟果シテ然ラ
ハ其利害如何何等ノ能アルヲ以テ獄吏タルノ職ニ善

ク適スルモノトナス歎貴國官吏ノ其職ニ適スルモノ
良否平均ノ負數如何貴國ニ獄吏習業ノ學校設立アリ
ヤ設立アラハ其成效如何或ハ設立ノ有無ニ掲ハラス
是等専門ノ教育ハ刑法ヲ善美ナラシムルニ至要ノ事
業タルベシトセラル、ヤ閣下ノ高慮如何

答 獄吏任官ノ法ハ警視長官ノ見込ヲ以テ之ヲ余ス奉
職ノ程規未タ定メナシ現今ノ形勢ニ付政治上ノ持論
ハ警察官ヲ以テ之ニ充ツルヲ適切ナリトス如何トナ
レバ犯罪ヲ未發ニ豫防スルハ警察固有ノ權ニシテ既
發ノ犯罪トモハマタ其保護權内ニ関涉スルノ歎ナ
カラザレハナリ又タ其利タルヤ看守備嚴ナルヨリ自
然逃亡脱監ボヲ謀ルモノ稀レニシテ且ツ品位アル警
察官ノ嚴懲ニツツナカラ行ハル、ハ囚人自ラ恭順恭

敬スルナリ
獄吏タルノ職ニ適スルハ能ク法律政治ノ學ニ通曉シ
仁愛温厚ノ徳ヲ備ヘマタ活潑勇膽ナル者ニ非ラザレ
ハ獄司ノ職ニ適表スト謂フヲ得ス本邦ノ獄吏能ク
此徳ヲ具シテ此職ニ當ルモノ幾許アルヤ其良否未タ
知ラス

第四 懲治ハ罪惡ヲ未然ニ戒ムルノ爲カ或ハ之ヲ将来
ニ懲ラスノ爲メカ若シクハ此兩様ノ爲歟何レニセヨ
其効ヲ達スルノ方法如何囚徒ノ助中ニ深ク期望心ヲ
起サシメムヲ求メラル、ヤ之ヲ起サシムルニ何等
ノ方法アリヤ勸善懲惡ノ道ニ行フニ最モ依據セラル
ハ賞カ罰カ或ハ人ヲシテ恐懼ノ念若シクハ希望ノ
心ヲ生ヤシムルニアル歟各其ノ種類成歟如何

答 懲治ハ罪惡ヲ未然ニ豫防スルモノアリ將來ニ懲ラ
スモノアリ決シテ一樣ナラズ其効ヲ達スルノ方法ヲ
研究スルニ於テハ專ラ勸善ノ學ヲ授ケ又ハ德善純良
ナル教門ヲ聽聞セシメ又ハ將來裨益トナルノ工業ヲ
勸奨シカメテ囚徒之助中ニ期望心ヲ起サシムルニア
リ故ニ其品行勤勉羣衆ニ卓越スルモノアレバ乃チ之
ヲ獎賞ス(或之レヲ賞スルノ法ハ常食外ニ賞錢ヲ加給シ
セシムル表)其賞再三ニ及ブ如キハ尚ヲ德行ノ刑期ヲ短縮
シ愈々期望心ヲ發生セシムルニ切ナルノ方ヲ設ケル
ニアルナリ
先年准流十年ノ刑ニ處セラレシ飯岡仙三即ナル者ハ
深ク先非ヲ痛悔シ能ク獄則ヲ遵守シ他囚ヲ勵マシ工
藝ヲ勉メ改心ノ實功顯露スル者ニ依リ獄司其狀ヲ具

申シ特典ヲ以テ本罪ニ一等ヲ減セラレ既ニ彼過スル
ヲ以テ直チニ決放シタリ然レニ本人志願ニ依リ獄司
ニ於テ獄丁ニ採用セラレ大ヒニ其職ヲ盡シタル者アリ
又同年刑ニ處セラレタル寶田留五即チ此者ハ同シク
先非ヲ痛悔シ勤勉服役怠ラザリシガ昨年其實家ノ火
災ニ罹ルヲ聞知シ僅カニ得タルトコロノ傭工錢ヲ集
メテ其母ノ許ニ送りタリ同囚ノ者セ之ヲ稱嘆ス本年
十二月四日本罪ニ一等ヲ減セラレ既ニ彼過スルヲ以
テ直チニ放免申渡サレタリ(外數例アレヒ茲ニ畧ス)
第五 道德ニ宗教上ノ方術此類ハ何等ノ事ヲ行ハル
ヤ有志ノ人獄内ニ來リ日曜學校等ニテ囚徒ノ教導
ニ尽力スルト欲スレバ之ヲ准允セラルトヤ又囚徒友

人ノ文通或ハ來訪ヲ許スハ囚徒ニシテ自ラ悔ヒテ改心セシムルノ効アルヤ否

答 道德并宗教上ノ方法ハ日曜日毎ニ教導職ヲ延イテ説教ヤシメ且ツ幼少ノ者ハ其感懐ノ最モ敏速ナル者ニ因リ十八歳未満ノ者ハ正午ヲ限リ役ヲ終ヘ専ラ勸善學ヲ教授ス又夕有志ノ人獄内ニ來リ教導ニ盡カセント欲スルモノアルキハ之ヲ許ス

囚徒ノ親戚朋友等ヨリ書信ヲ通センコトヲ請フモノハ獄吏檢閲シテ無害ノ者ハ之ヲ許ルシ有害ノモノハ之ヲ戻却スマタ面會訪問ヲ請フキハ之ヲ聽ルス是レ夫ノ慈愛掛念ノ情ハ親族妻子ヨリ切ナルモノナシ故ニ面會對親ヲ聽ルスキハ互ニ其胸衷ニ深沈セル真情ヲ喚起シ來リ寤寐轉輾シテ為メニ改惡皈善ノ心情ヲ誘

導スレバナリ

監獄則ニ面會書信ノ制限アリ是寧只其制限ヲ廢シテ通信來訪者ヲ掣肘セザラスコトヲ要ス故ニ自今ハ度數ノ制限ヲ用ヒス

第六 教育ノ入獄罪人教育ノ概狀囚徒平均ノ教育ト獄外常人ノ教育トノ比例如何在獄中學校書籍縱覽所新聞紙講義及ヒ其他ノ支ニテ囚徒ヲ善心ニ導クニ如何ナル貴額ノ定メアルヤ

答 教育ハ夜中檻内ニ點火ヲ許ルシテ各自欲スル所ノ書籍ヲ講讀ヤシメ又夕囚人ノ中ニ學力アル者ヲ撰ミ毎檻ニ附ケ置キ讀者ヲシ獎勵セシム一ヶ月一度獄司之ヲ試験シ甲乙丙ノ三級ニ分テ筆墨紙等ヲ與ヘテ之ヲ賞ス故ニ入獄ノ時一丁字ヲ辨ゼザル者ト雖モ遂ニ

普通ノ學ニ通スル者アリ
 常人ノ教育ニ比較スルキハ其進歩ノ迅速ナルヲ覺エ
 是レ益シ其愚事ヲ爲スノ才智ハ決シテ魯鈍ニアラズ
 且佗ニ遊興等ノ心ヲ誘フモノ無ケレバナリ
 學校ト稱シテ殊ニ設ケタルモノナシ適宜ノ檻内ニ於
 テ之ヲ行フ事第五條ノ貴問ニ明辨シタルガ如シ書籍
 縦覽所ノ設ケナシ
 新聞紙ハ禁獄人ニ許ルシテ懲役人ニ許サス
 到底許スヘキ生贖ナレモ吾邦ノ罪囚ニハ未ダ尚早キ
 ヲ覺ユ如何トナレハ之ヲ與フル丈ノ益ヲ生セズシテ
 間々愚事ヲ聞知シ講究煉磨スルモノアレバナリ

第七 男女 在獄囚徒男女比較ノ員數如何

答 男女在獄併セ貳千八百人内
男千七百八人 女百人 付五人 半程割ナリ

第八 獄内勞役 貴國獄内ノ勞役ニ刑役ト工役トノ別
 アリヤ但シ工役トハ價ヲ生スル勞カニシテ刑役トハ
 徒ラニ懲罰ノ爲ニスル無益ノ勞カヲ云フナリ工役ハ
 如何ナル類ヲ用ヒラルハヤ囚徒ノ勞役ハ請合人ニ任
 セラルカ又ハ官署ニテ差配セラルハヤ工役ト刑役
 トノ可否並ニ其理由如何勞役ノ所得ハ獄費ノ補フニ
 足ルカ是ラサルハ不足ノ額幾許

答 獄内ノ勞役ニ刑役ト工役トノ別ナシ皆工役ナリ囚
 徒入獄ノ日ニ於テ殊藝ノ有無ヲ尋問シ藝下ル者ハ其
 業ヲ執ラレモ藝ナキ者ハ炊飯所又ハ土石ノ運搬ホニ
 使役ス然レモ一百日間ハ其生スル所ノ傭工錢ヲ給セ
 ズ殊藝ヲ上中下ノ三級ニ分テ上級ハ一日壹錢中級ハ
 五厘下級ハ貳厘五毛ノ工錢ヲ給ス其上級下稱スルハ

何藝ニ関セズ其使役ヨリ生スルノ益金十銭以上ヲ働
 キ得ルモノヲ云フ之ヲ概言スルキハ益金十分ノ一ヲ
 給與スルノ法ナリ
 工役ノ種類ハ 活版 紙工 張灯 水工 竹工
 藤工 鍛冶 鑄物 靴製 煉化 瓦 藁工 裁縫
 塗師 時繪 画工 農耕 漆工 紙漉 米搗 水汲
 蠟燭 紡綿 ノ類ナリ
 是等勞役ハ請合人ニ任カスモノアリ官署ニテ差配ス
 ルモアリ工役ノ利便ヲ謀ル故ナリ
 工役ト刑役トノ可否ハ極メテ工役ヲ可ト爲ス何ント
 ナレバ刑役ハ一時ノ懲戒ニ止マルモノニシテ決メ之
 ヲ以テ其中心ノ悔悟ヲ發生セシムルニ足ラザレバナ
 リ工役ノ利タル之ニ異ナリ已レ勞スルト否ラザルト

二依リ受ル所ニ工錢モ亦多少ハ差違アルヲ以テ自然
 互競ノ念ヲ發シ物品ヲ多ク製出ス又々其製品ヨリ生
 ずルノ利金ヲ官署ニ領置シ放歸ノ後一家ノ資産ニ供
 スルノ方アリ是其情心ヲ懲ラシ生計ヲ営ムノ方ヲ授
 クルニ於テ最モ有益ナルモノナリ
 現今ハ勞役ノ所得ヲ以テ獄費ヲ補フニ足ラズ獄費總
 額ノ半バ或ハ三分ノ二ヲ補フニ足ル(例ヒハ一年六万
 円或ハ三分ノ二四万円ヲ補ハ即三分ノ一)然レモ毎年ニ
 利金ノ増植スルヲ以テ不日ニ工場ノ全備整頓スルニ
 至ラバ獄費ヲ全償スルモ亦々容易ナルベシ
 第九 獄内衛生上ノ事入獄後囚徒ノ健否衣食ノ良否空
 氣并ニ下水ノ通塞囚徒身体并ニ獄室ノ潔不潔寒温明
 暗及テ病人死者ノ多寡如何

答 獄内衛生上ハ医員數名ヲ撰ニ特ニ病檻ヲ築造シ病
囚ヲ治療スルハ常人ニ異ラズ此ノ病檻ノ周圍ニハ花
水數株ヲ培植シ食物ハ医員ノ請求ニ任カシカメテ根
生ノ道ヲ尽クス故ニ健壯ニ復スル者常ニ多シ囚人衣
食ハ鮮良ナリ空氣下水ハ流通善シ獄室ハ光明ナレ氏
清潔ナラズ旧政府ノ案且ツ冬分ハ凍寒甚タシキカ故
監内ニ温火ヲ入ル、ヲ許ルス病囚ハ平均囚徒貳千八
百人ノ高ニテ病者平均百二十人ノ割ナリ
罪科期限ノ平均百日以下百分ノ六十年百分ノ十終
身百分ノ三一年以上七年マデ百分ノ三
第十 所刑ノ事終身以下所刑時間ノ等差并ニ長短平均
ノ時間如何終身刑ニ処セラル、ハ何等ノ罪惡アルヤ
輕罪ノ重犯ハ短期ノ刑ヲ重子科スルノ法アリヤ若シ

之アラハ其法罪惡ノ増減ニ如何ノ効用アリヤ終身刑
ハ死セサレハ止マサルガ常款又ハ行政官ノ仁恕ヲ以
テ屢々刑期ヲ短縮スルコトアリヤ然ランニハ是等ノ恩
赦ニ定律ニ基キ行フモノ歟又右等ノ場合ニ於テハ平
均在獄ノ時間如何
答 懲役ハ十日ニ初テリ終身ニ終ル甚等差ハ十日廿日
三十日四十日五十日六十日七十日八十日九十日百日
一年一年半二年二年半三年四年五年七年十年終身是
レナリ
役限内罪ヲ犯セバ役ヲ加ヘ或ハ捧鎖ニ處ス終身刑ハ
死セザレバ止マザルガ常ナリ然レモ第四条ニ答ヒシ
如ク改心ノ功驗アルモノハ特別ノ寬典アリテ刑期ヲ
短縮ス假令バ工藝ヲ勉勵スル者或病囚ヲ看護スル者

或ハ同囚ヲ誘ヒテ勸善ノ學ヲ勸ムル者オ皆非常ニ卓
越スル者ハ獄司ノ具狀ヲ待ツテ施行スルモノナリ終
身刑ニシテ一等ヲ減スルハ十年トナル十年ハ七年
トナル前ノ等差ニ依リテ増減スルモノトス若シ終身
刑ノ者十年ヲ役過シテ一等ヲ減セラルルハ直チニ放
免ス是等ノ寛典ニ處セラルル者現分ニ至ルマデ百分
ノ一二ニ過キズ

第十一 死刑貴國ニ死刑ノ法アリヤ否若シ之ヲ廢セント
ナレハ之カ為メニ罪惡ノ増減如何死刑尚存セハ何等
ノ罪惡ヲ此刑ニ処セラルルヤ衆論ハ此法ヲ是トスル
ヤ
答 死刑ノ法存ズ分邊カニ之ヲ廢スルヲ得ズ之廢スル
所ハ罪人ヲ増殖スル必然ナリ死刑ハ人命及放火等終

身刑ノ上ニ出ツル重罪人ヲシテ之レニ處スルナリ
死刑ノ輿論ハ未可廢ノ説ナリ
論者曰ク死刑ハ未可廢ナリ然レモ梟斬ハ最早廢スル
可ナリ元來死刑ニ三種アリ曰ク絞曰ク斬曰ク梟絞ハ
其首ヲ絞リ命ヲ畢ルニ止ム斬ハ其首ヲ斬ル梟ハ其首
ヲ斬リテ刑場ニ梟示ス是ハ別アリト虫氏其死スルハ
即チ一ツ而已然ルニ其行刑後死骸ノ下付ヲ請フ者ハ
絞罪ニ多ク梟斬ニ稀ナリ豈其慘酷ノ甚シキヲ忌憚ス
ルノ心情ニ出ツルニ因ル歟然レモ之ヲ以テ罪人ヲ減
スルノ切驗アルヲ見ズ寧ロ死後ニ於テ形骸ヲ思ハ
ノ理由アラシヤ云々

第十二 負債ニ就テノ入獄 此法尚未タ存スルヤ若シ然
レハ負債者在獄中ノ取扱ハ罪囚ト異ナルナキカ公論

ノ之ヲ是非スル如何

答 負債ニ就イテ入獄スルノ例ナシ然レモ今マ其レニ似寄リタル一例ヲ擧ケテ參看ニ供ス過失殺傷等ノ罪ヲ犯カシテ其身償フテ能ハザルモノハ姑ラク懲治檻ニ入レテ使役シ其傭工錢ヲ以テ被殺傷者ノ家ニ給シ其額ニ滿チテ後放還ス是等ノ取扱ハ罪囚ト全ク別異ナリ

第十三 懲治ノ効跡在獄中罪囚ノ取扱ハ專ラ改心遷善セシムルノ目的ナルヤ囚徒ハ一般入獄ノ時ヨリ善ト爲リ若シクハ惡ト爲リ出獄スルヤ改心スル者ノ割合如何

答 改良ハ囚人ヲ待スルノ大眼目ナル年ヲ待タズシテ明カナリ又々出獄者ノ心術ハ入獄ノ時ニ比シテ改

悔スル者ハ概テ百人ニシテ十人ノ割合ナリ

第十四 放免ノ囚徒放免ノ囚徒ヲシテ再ヒ罪惡ニ陥ラシメサラムガ爲ニ何等ノ方法アリヤ之カ爲ニ助救社ノ設ケ洽ク行ハルハ其ノ社費ハ何処ヨリ出ルヤ社業ノ景況ニ其成跡如何衆情之ヲ可トスルヤ否

答 放免ノ囚徒ヲシテ再ヒ罪惡ニ陥ラザラシメンカ爲メニ助救社等ノ設ケナシ若シ是等ノ設立アルハ再犯ヲ防ク方法ニ於テ殊ニ有益ナラン

第十六 罪科ノ種類ニ原因貴國ニ於テ最モ多キハ何等ノ罪惡ナルヤ其ノ主タル原因如何

答 罪種ノ種類前ニモ陳述セシ如ク竊盜ヲ以テ最モ多シトス其原因概テ貧窮ヨリ生ス

ヤ差別アラハ其異ナル所如何各所ノ負數性質及ヒ一
般ノ効驗如何各所ニテ教育ヲ受ル者ノ平均負數如何
右ハ一家ノ私立カ又ハ公衆ノ共立ナルカ若シクハ西
制共ニ行ハルノ歟衆論ハ寂モ孰レヲ是トスルカ而シテ
其故如何

答 子弟預戒所設立ナシ所謂懲治檻ノ性質是ノミ假令
ハ子弟ノ輩教々父母ノ教令ニ違背スルモノ等其父母
親戚ヨリ懲戒ヲ出願スル時ハ該檻ニ入レテ適宜ノ業
ヲ教ハ亦タ讀書ヲ授ク現今負數三十人此檻ノ支配ハ
官署ニ於テス費用ハ出願者ヨリ一日ニ付金八錢ノ食
料ヲ償ハシム然レモ無カニシテ不能償者ハ懲役費ヲ
以テ之ニ充ツ一般ノ効驗著シレシカラズ

第十五條及ヒ第十八條以下ハ爰ニ答辯セズ該條ハ裁判

官ノ意見ヲ問フテ可ナリ

疑問第一條

貴閣下ノ軍隊ハ中央機關有司ノ管轄ニ歸スル故ニ
其ハ刑ヲ其支配ノ權ハ彼ノ有司ニ於テ總ニ之ヲ專
スル効驗ヲ地方有司ト是ヲ分轄スル故
其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其
軍隊ハ地方官保護ノ權ニハテテ其

疑問第一條

貴縣下ノ牢獄ハ中央總轄有司ノ管轄ニ歸スル歟然ル
氏ハ則チ其支配ノ權ハ彼ノ有司ニ於テ總ノ之ヲ專有
スル歟將タ地方有司ト是ヲ分轄スル歟

兵庫

牢獄ハ地方警保課ノ擔任タリ地方長官ハ大政府ノ命
ヲ奉シテ之ヲ管轄ス刑罰ハ判事之ヲ申渡シ警保官是
ヲ施行ス

大坂

牢獄ハ我政府ノ管理ニ皈スルト雖モ罪人ヲ處分スル
ハ裁判官ニ在テ刑ヲ行フハ大坂府ニアリ

東京

裁判官ニ在テ刑ヲ行フハ大坂府ニアリ

牢獄ヲ專轄スルノ衙門ナシ内務省ニ於テ之ヲ統轄ス
則東京府下ハ同省警視局ノ擔任ニシテ各地方ハ各地
方官ニ於テ之ヲ分轄ス刑政ノ權ハ司法省ニアリテ行
政官ノ有スル所ロニアラズ

疑問第二條

牢獄ノ分科ハ如何

兵庫

本牢懲役留置假牢女檻病檻ノ六種トス

大坂

第七十二條答書ニ因リ推考スヘシ

東京

牢獄ノ種類六ツアリ曰ク未決監曰ク已決監曰ク禁獄
監曰ク病監曰ク懲治監曰ク女監是ナリ

疑問第三條

牢獄房子ノ設ケ方縱横幾于

兵庫

別紙圖ニ因リテ是ヲ推知ス可シ

大坂

房子ノ設ケ方其形状等實地過日見覽ノ通り

東京

牢獄房子ノ設置法ハ一囚一室ノ制ナリト雖モ現今ハ

旧牢（旧政府モノ集）ノ存ズルガ故ニ衆囚同室ノ制ノ多

シ獨リ未決監ト禁獄監ニ限リ一囚一室ノ制實際ニ行

ハル其制一房ノ縱横九尺四方ナリ然レモ未決囚ノ衆

多ナルモハ不得止雜居セシムルコトアリ然レモ一房五

名ニ過クルコトナシ

疑問第四條

牢獄中ニ罪人分科ノ方法ヲ設ケラル、歟若シ然ラハ其用法及夫ノ結果ハ如何一年少罪ヲ犯スモノ老黠ノ犯徒ト認メラル、者ノ為メニ蠱惑煽動セラル、ヲ防遏スル事ニ盡カセラル、歟

兵庫

未決ノ囚ノ重キ者ハ本牢ニ入レ輕キモノハ假牢ニ入ル已決ハ懲役トシ本籍吟味中ノ者ハ留置ニ處ス總テ年少年老ノ別ナシ女檻病檻ハ圖ノ如シ

大坂

罪人ハ同類手合初犯再犯輕重ヲ區分シテ惡誘ナカラシム一房ニ一名或ハ二名頭タル者ヲ置キ蠱惑煽動ナキ様注意セレム

東京

罪人分類ノ法ハ未決既決ノ二ツニ大別シ亦之ヲ分ツテ女監病監少年監ナ別異殊ニ少年輩ノ如キハ其大人外室房ヲ混同セシムル所ハ惡事ヲ煽動シ及ヒ根襲ノ事ヲ起シテ以テ常ニ嚴肅ニ區別スルヲ要ス又々其初犯再犯ニ於テハ却テ雜居セシムル方ヲ善シトス如何トナレバ偏ヒニ重刑者刑期モノ三ヲ一舎ニ集ル所ハ互ニ協同シテ惡計ヲ企望スルノ嫌アレバナリ

疑問第五條

監督及ヒ他ノ獄吏ヲ命スル者何人ニ在ル歟其職務ノ定限ハ如何

兵庫

監督及ヒ獄吏ハ縣令之ヲ命ス其最下等ノモノハ警

保課長之ヲ命ス職務章程ハ別冊ノ通

大坂

監督及ヒ他ノ獄吏ヲ命スル者ハ大坂府長官ナリ其職務ノ定限ナシ

東京

特ニ監督官及ヒ獄官ノ名称無シ警部ヲ以テ之ヲ擔當ス擔任ヲ命ズルハ警視長官ノ權内ニアリ其職務ノ定限ハ別冊ノ通

疑問第六條

獄吏ハ第一何等ノ才能ヲ以テ欠クヘカラサル者ト做スカ又大半ハ此ノ才能ヲ有スル歟

兵庫

破牢逃逸ヲ禦キ得ルヲ第一才能トス

大坂

身體健康ニシテ武術ヲ心得タル者及ヒ粗ボ文筆ニ通スル者ヲ用ユ大半此ノ才能ヲ有ス

東京

獄司ハ殊ニ仁愛緻密ノ性徳ヲ有シ法律政治ノ學ニ通曉スルヲ以テ獄司ノ職ニ適スルノ才能ト謂可シ本邦ハ獄吏大半此ヲ知徳ヲ具備スルヤ否未タ知ラズ

疑問第七條

獄吏能ク其職ヲ盡シ得ルタメニ何ヲ以テ之ニ教ユル歟日本ニ在テハ學校ヲ設ケ而メ獄吏ヲ教誨スルヲ欲セラル、歟

兵庫

獄吏ヲ教ユルノ法ナシ

大坂

獄吏ノ事ニ付將來ノ意見目今答ヘ難シ

東京

獄吏ヲ教育スルノ學校ナシ

疑問第八條

獄吏年已ニ老ヒ若シクハ他事ニ因テ其職守ヲ盡ス
能ハサル者ハ何恩賞ヲ賜ハル歟

兵庫

職掌ニ因テ癡疾ニ至ルモノハ政府ノ特典アリ老年ニ
付特典ナシ

大坂

獄吏年已ニ老ヒ若シクハ他事ニ因テ職掌ヲ盡ス
能ハサルモノ恩賞ノ定限ナシ

東京

獄吏退職ノ後休老恩賞等ハ他ノ文官ニ異ルナシ

疑問第九條

大坂獄ノ資金ハ官府ニ係ルカ人民ニ屬スル歟囚人ノ工
作ニ因リテ其幾分ヲ償却セラル、歟

兵庫

新建築等ハ官一分民二分トス修繕ハ悉ク民ニ出ス雜
費ハ悉ク官費タリ

但懲役人工作ノ料ハ監獄則懲役第十二條并ニ明治

大坂

八年内務省乙第三十九號達書ニ因テ處分ス
大坂獄ノ資金ハ官府ニ係リ工作ニ因テ償却ナルナシ

東京

牢獄ノ資金ハ皆官府ニ係レリ懲役人工作上ヨリ生ス
ル所ノ利益ハ獄費ノ半額又ハ三分ニテ償却スルニ足
ル

疑問第十條

牢内ニ在テハ囚人ニ工役ヲ取ラシムル歟然ラハ其工
役ノ種類如何

兵庫

懲役ノ徒ハ工作ヲ爲サシム筵繩竹細工大工付木挿師
船苦土工等ノ類又囚ハ紡績茶撰裁縫洗濯ノ類

大坂

役場内外ニ在テ取ラシムルナリ則内役間頭副間頭看
病頭看病炊薪割掃除大工營繕手傳木挽指物木履工精
米同白回リ同倉働紙漉紙張紙打紙屑撰井戸繩絢荷造

繩絢草履工草鞋工筵織網結籠工手拭下書足袋縫耕耘
外役諸品運搬荒地開墾街路修繕川浚土砂運送刑死並
未已決
病遺骸片付女内役間頭副間頭看病糸紡針仕事洗濯網
結花緒緒縫紙屑撰同外役洗濯ナリ

東京

牢内ニ在ツテ使役スルトコロノ工作ハ現今ノ種類ヲ
左ニ掲活版紙工張灯木工竹工藤工鍛冶鑄物靴製煉化
瓦藁土裁縫塗師蒔繪画工農耕沫工紙漉米搗水汲蠟燭
紡綿ノ類ナリ

疑問第十一條

入獄ノ時ニ當テ其生業ヲ知ル者幾于ナル歟

兵庫

生業ヲ知ル者甚々少シ

大坂

多クハ農工商ノ類ニシテ其精細ノ調ナリ難シ

東京

入牢ノ時ニ方ツテ其生業ヲ知ルモノ最モ稀ニシテ十人ニ付一人ノ割合ナリ

疑問第十二條

罪人牢内ニ在テ生業ヲ學ヒ做ス歟

兵庫

生業ヲ學ハス

大坂

牢内ニ在テハ生業ヲ學ヒ做スヲナシ

東京

牢内ニハ有益ノ書籍ヲ與ヘテ講讀セシム因徒ノ學識

アルモ以テ選シテ每檻ニ附ケ置キ教授訓導怠ラザル

疑問第十三條

罪人入牢中自助ノ術業其放囚ノ時ニ當テ淳カヲ學フヲ

以テ緊要ト做ス歟然レハ何ヲ以テ之ヲ能シ得ルカ而

メ其結果如何

兵庫

自助ノ術業ヲ學フヲ緊要トスルヲ勿論ナリト雖モ恨

ラクハ未タ恰當ノ法ヲ得ス

大坂

入牢中自助ノ術業ナシ

東京

入牢中自助ノ術業ハ第十條ニ述フル如ク專ラ將來碑

益トナルノ工業ヲ授ケ放役ノ后一家ノ産業ヲ營ムヲ
識ラシム今其實蹟ヲ徴セシ一例ヲ舉ケン去ヌル明治
四年ノ頃窃盜ノ科ニ仍リ懲役二年半ノ刑ヲ受ケン者
ニテ細井吉左エ門ト云ヘルモノアリ其入牢ノ時ニ於
テハ一箇ノ職業タモ知ラス實ニ無能無藝ノ者ニテア
リシカ其二年間ノ服役中木工場ニ在リテ日々木挽ノ
術ヲ勉勵シ放役ノ時ニハ最早一人前ノ職工トナリ今
マニ至ルマテ該職ヲ以テ一家ヲ維持シ生計ヲ營ム者
アリ自助ノ術業ヲ授ケルニ於テハ豈銳意セザルヲ得
ンヤ（其他數例）

疑問第十四條

罪人ハ放囚スルニ至テモ尚盡カシテ其操業ヲ担保セ
ラルカ此カ爲メニ會社ヲ設ケ盡カスルモノアルヲ欲

スル歟

兵庫

放囚ノ節ハ心得書ヲ讀ミ聞カセ本籍ニ送り回スニ止

大阪

罪人ハ放囚スルニ至テ其操業ヲ保セシムルニ盡カス
ルコトアリ此カ爲メ會社ヲ設ケ盡カスルヲ願フ者アラ
ハ其設方ニ依リ之ヲ許スコトアリ

東京

放囚ノ后尚ヲ工業ヲ担保セシムルノ方法ナシ若シコ
レアラバ再犯ヲ防クノ方法ニ於テ殊ニ有益ナラン

疑問第十五條

獄則中毎ニ違犯スル者何事ニアル歟

兵庫

逃走ヲ企ルヲ多シトス違犯ノ徒ハ棒鎖ヲ加ヘ之ヲ懲

大坂

反獄脱監等ヲ謀リ或ハ官物ヲ破毀シ禁止ノ品包藏ス

東京

獄則中違犯ノ多キハ喧嘩口論ヲ以テ最モトス

疑問第十六條

牢内ニ於テ教育法ニ關カル何ノ懲罰ヲ行ヒ而メ是レ

兵庫

一向宗僧徒ノ説教アリト雖トモ其レニ關カル懲罰ノ

法ナシ以下十七十八十九二十條之レニ準ス

大坂

獄則ヲ犯ス者棒鎖ノ罰ヲ用ユ重キハ一日輕キハ半日

東京

教育ニ關セル懲罰ナシ獄則ニ背令スルモノハ棒鎖暗
室等ノ懲戒法ヲ用ユ虚病ヲ構ヒテ工役ヲ怠ルモノ逃
脱等ヲ勸ムルモノ同囚ノ勤勉ヲ妨クルモノ諸工作場
ニ在テ品物ヲ私テ造作スルモノ等凡テ本律ニ關涉セ
ザル者ハ獄司ノ專決ヲ以テ懲戒法ヲ行フ棒鎖暗室ノ
方監獄則ニ之ヲ詳ラカニス但シ監獄則ニハ罪囚ヲ罰
則ハ棒鎖暗室ノニ
監獄則ニ曰

第一則棒鎖鐵棒ヲ兩足ニ繫鎖シテ佇立セシム其時間ニ半日終日ノ別アリ凡ソ獄則ヲ犯シ輕キ者ハ此罰ヲ用ユ

第五則闇室囚人ヲ闇室入レ飯水ノミヲ給シ人ト言語ヲ接スルヲ許サズ七昼夜ヲ以テ期トス若シ改心セバ其限ニ滿タズト虫氏免シテ之ヲ出ス

疑問第十七條

斯ノ懲罰ヲ詳細ニ執簡セラル、歟

兵庫

第十六條ニ準ス

大坂

斯ノ懲罰ハ詳細ニ書留置ナリ

東京

問旨未詳

疑問第十八條

懲罰ヲ以テ驚怖寒心セシムルヲ以テ因テ顯然再犯ノ數額ヲ減少スルニ至ル歟

大坂

懲罰ヲ用ユルニ因リ再犯ノ數額減少ノ効アリ

東京

再犯ノ數ヲ減セザルニ非レトモ畢竟一時ノ警怖ニ止

ルハ中心ヨリ悔悟ノ念ヲ發生スルモノハ此法

ノ功驗ニアラザルナリ

疑問第十九條

懲罰ニ因テ囚人ノ感得如何

大坂

懲罰ニ因テ囚人感得ノ徴アリ

東京

懲罰ニ因テノ感得ハ十八條ノ通り

疑問第二十條

懲罰ニ由テ身體ノ健康上ニ何事ヲ來スカ

大坂

懲罰ニ由テ身體ノ健康ヲ害スルヲナシ

東京

身體ノ健康ヲ害スルヲナシ

疑問第二十一條

牢獄ノ主意ハ罪人ノ過チヲ悔ヒ善ニ皈スルヲニアル

力或ハ唯ニ其罪過ヲ責罰スルヲ目的トセラルカ

兵庫

兩意並ニ存スルハ其ノ中ニ一ニシテ他ニシテハ不可

大坂

惡ヲ改メ善ニ遷ラシムルヲ主意トス

東京

改過皈善ヲ目的トスルハ勿論ナリ唯ニ其罪過ノミヲ

責罰スルハ主トスル所ニ非ス

疑問第二十二條

囚人品行善良又勤カナルトキハ是レカ爲ニ禁獄ノ期

限ヲ短減スルカ其行法ハ如何

兵庫

特別ノ者アレハ具狀シテ政府ノ特典ヲ乞フ

大坂

囚人品行善行勤カナルトキ是レカ爲ニ禁獄ノ期限ヲ

短縮スルハ其行法事實ヲ獄司ニ具状シテ裁判官ニ報
シ裁判官之ヲ處分ス

東京

品行勤勉衆囚ニ卓越シ悔悟ノ實切頭露スル者ハ獄司
其情ヲ具状シ特典ヲ乞フテ刑期ヲ短縮ス

疑問第二十三條

罪人ノ憤心ヲ勸發スル爲メニ獎賞ヲ設ケラルカ

兵庫

獎賞ノ法ナシ

大坂

罪人ノ憤心ヲ勸發スル爲ニ褒賞ノ設ケヤリ

東京

獎賞ノ法アリ別食ヲ給シ色變リノ獄衣ヲ與ヘ飯善ヲ

表セシム

疑問第二十四條

囚人ハ幾回信書ノ往來ヲ得ルカ

兵庫

監獄則第九條ノ通り第廿五條モ之ニ準ス

大坂

囚人信書ヲ往來スルハ已ムヲ得サルヲ情願アレハ聽

ルス

東京

信書ヲ往來スルニ制限ナシ獄吏之ヲ換閱シ無害ノ者
皆コレヲ許ス囚人ヨリ差出スモ亦然リ唯制規アル官

ノ印紙ヲ與フルノミ

疑問第二十五條

囚人其友ト信書ヲ往來スルコトハ罪人中ニ在テ善導或ハ惡誘トナルヲ實見スル乎

兵庫

前條ノ答ニ準ス

大坂

書信ハ要用ヲ通スルノミ罪人ノ善惡ニ關スルナシ

東京

親戚朋友ト信書ヲ往來スル爲メニ飯善ノ念ヲ發スル

ヤ實ニ淺水ナラズ囚人ハ其官署ガ待遇ノ厚ヲ通信シ

親戚朋友ヨリハ將來ノ教戒并諫言ヲ通信スレバナリ

疑問第二十六條

囚人其友ノ候問ヲ受クルコトヲ得ルカ

兵庫

友ノ候問ヲ許サス

大坂

第廿四條第廿五條ノ如シ要用ノ外友人ノ候問ヲ許サ

ス

東京

親戚朋友ノ候問ヲ聽ルス

疑問第廿七條

斯ノ候問ノ處置如何其接話ヲ聽キ紀ス爲メニ一吏ヲ

命スルカ或ハ否ラサルカ

兵庫

前條ノ答ニ参考スヘシ

大坂

面會スルトキハ接話ヲ聽紀ス爲メニ官吏兩名ヲシテ

其席ニ莅マシム

東京

候問ヲ聽ルシテ說話ヲナスキハ必ス一吏ヲ立會セシム

疑問第二十八條

斯ノ候問ニ因テ罪人ノ情致如何善ナルカ惡ナル歟

兵庫

前條ノ答ニ參考スヘシ

大坂

面會スルニ因テ罪人ノ情致善惡ニ關スルナシ

東京

此候問ハ囚人ヲシテ掛念ノ真情ヲ喚起セシメ悔惡反正ヲ誘導スル最モ緊切ナルト信ズ

疑問第二十九條

罪人毎子ニ家族ヲ眷顧スル情ヲ失ワサル爲ニ盡カセラルル歟

兵庫

斯ノ事ニ注意セス

大坂

家族ヲ眷顧スル情止マサル様盡カノ法ナシ

東京

家族ヲ眷顧スル情ヲ絶ガラシムルガ爲ニ前條ノ如ク親戚朋友ノ候問及ヒ信書ニ度數ノ制限ヲ用ヒザルナ

疑問第三十條

世上能ク知ル所ニ因レハ罪人ノ父母タル者何慣習ア

ルヲ常トスルカ人民社會ニ於テハ如何ナル品位ノ者
ナル歟

兵庫

下等無教ノ者百中殆ント九十九ニ居ル

大坂

罪人ノ父母タル者平常ノ慣習知り難シ人民社會ニ於
テ多クハ下賤ノ者ナリ

東京

罪人ノ父母タルモノ概テ不學無術ニシテ子弟教育ノ
何物タルヲ知ラザルモノナリ

疑問第三十一條

牢内ニ在テ發狂スル者總テ幾個

兵庫

大坂

牢内ニテ發狂スル者一モ是レナシ

東京

明治元年ヨリ昨明治九年十二月迄ニ入監スル懲役人
壹万八千五百廿八人ナレ氏狂病ヲ發スル者一人モナ
シ

疑問第三十二條

牢内ニ教法及ヒ倫理ヲ教訓スル師アルカ

兵庫

未タ之ヲ置カス僧徒ノ來リ教ユルヲ第十六條ノ如シ

大坂

教法倫理ヲ教訓スル師ナシ

東京

東京

日曜日毎ニ必ず教導職ノ者ヲ延イテ説教シム

疑問第三十三條

男女ヲ問ハス牢内ニ入り善道ヲ勸解スル爲メニ勉勞スルコトヲ得ル歟

兵庫

乞フ者アレハ許スヘシ

大坂

他ヨリ説語ヲ許サス依テ牢内ニ入り善道ヲ勸解スル者ナシ

東京

然リ

疑問第三十四條

其牢内ニ入ルヲ得ルトキハ罪人ノ能ク讀書寫字スル者幾千ナルカ

兵庫

試験セス

大坂

繫獄スル時能ク讀書寫字スル者取糺サザル故員數知レ難シ

東京

入獄ノ時讀書寫字ヲ能スル者ハ二十人ニ付一人ノ割合ナリ然レモ教育ノ設ケアル故ニ月々増植ス

疑問第三十五條

牢内ニ在テ罪人ニ讀書習字ノ術ヲ教ニルカ

兵庫

教ヘス

大坂

讀書習字ノ術教ユルナシ

東京

讀書習字ノ學ヲ爲サシムルハ書籍等ヲ貸シ與ヘ日暮
ハ監内ニ燈火ヲ點シ午後十時ニ至ルマデ各自朗誦ス
ルヲ聽ルス故ニ入監ノ時ニ於テ一丁字ヲ弁ゼザル者
ト雖モ服役中普通ノ學課ニ通スル者間々歎ナカラス
疑問第三十六條

罪人ノ爲メニ牢内ニ書籍ヲ備フルカ而メ具書類ハ何
ヲヤ

兵庫

書籍ヲ備ヘス新聞紙ヲ與フルノミナシ新聞紙ヲ與ヘ

大坂

囚人ノ望ニ任セ妨ナキ書籍ハ是ヲ許シテ貸シ與フ

東京

獄内ニ備ル所ノ書籍ハ 勸善書 經濟書 自助論 窮
理書 地理書 筆術書 習字書等ナリ

疑問第三十七條

罪人多クハ讀書スルカ讀メハ則何書ヲ好ム歟

兵庫

前條ノ答ヲ參考スベシ

大坂

前條ニ依ルベシ

東京

官ノ導ク所ニ據リ多ク前條ノ書籍ヲ講讀ス其他ハ備

東京府監獄

工錢ヲ以テ各自ノ欲スル書籍ヲ購求スルナリ
疑問第三十八條

全房ニ囚繋セラル者自由ニ相説話スルヲ禁セサルカ
兵庫

説話ヲ禁セス
大坂

全房ノ囚人互ニ説話スルヲ禁セス
東京

説話ヲ禁セス
疑問第三十九條

罪人入牢ノ時ヨリ放囚スル日更ニ悔改スルヲハ實事
ニ徴スヘキ歟
兵庫

徴ス可ラス
大坂

悔改スルノ事實確ト徴シ難シ
東京

悔改ノ徴アリ然レモ一般ニ非ラズ毎年刑期ヲ減スル
ノ特典ニ處セラルモノアリ
第三條小挽
ニ々々参考

疑問第四十條

囚人放赦ノ後其品性ヲ認ムル爲メニ盡カセラル、歟
兵庫

盡カセス
大坂

放赦ノ后其品性ヲ認レ爲メ盡カスルヲアリ
東京

東京警察規則

放赦ノ人名及ヒ犯状ヲ詳細ニ記載シ其管轄スル警察署ニ通知シ隱密ニ將來ヲ監査セシム

疑問第四十一條

牢獄ハ幾回警察シ而メ何人之レヲ爲スカ斯ノ警察ノ情形如何

兵庫

獄吏警察晝夜間斷ナシ

大坂

監内晝夜時ヲ定メス小頭守卒度々巡邏シ動靜ヲ警察ス

東京

獄内ニ五ヶ所ノ交番所アリ巡查ヲシテ間斷ナク輪番セシム警部ハ一時間毎ニ一度獄司ハ一日一度警視長

官ハ一ヶ月或ハニヶ月ニ一度司法卿ハ一ヶ年ニ一度ツ、巡見スルナリ

疑問第四十二條

牢獄ノ情形ヲ稟報スルカ之ヲ爲ス幾回又何人ニ於テスルカ

兵庫

情形ヲ稟報スルナシ囚徒ノ多寡ヲ月末縣令ニ具狀ス年末ニ至リ一年ノ計表ヲ内務省へ具申ス

大坂

異狀アレハ速カニ之ヲ當直獄吏ヨリ大坂府長官ニ告ケ事柄ニヨリ長官ヨリ内務省或ハ裁判官へ報スルナリ

東京

稟報ハ人員及ヒ事故表ヲ製シテ詳細ニ記載シ日々午前十時迄ニ副司之ヲ長官ニ呈ス又一ヶ月毎ニ細表ヲ作ツテ新聞紙ニ廣告スルヲアリ

疑問第四十三條

牢内男女ノ比例幾于ナル歟

兵庫

大凡男十分ノ九女十分ノ一

大坂

明治八年中繫獄人員一千四百五十三名ノ内男一千三百七十一名女八十二名ナリ

東京

昨明治九年ノ比較ニ據レハ懲役人男貳千八百七十二人女七十六人ニテ大約男子三十七人ニシテ女子一人

ノ割合ナリ

疑問第四十四條

囚獄ノ罪人ハ何罪ヲ以テ多シト為ス歟

兵庫

盜賊ヲ以テ多シトス

大坂

竊盜ノ罪人多シ

東京

竊盜ヲ最モ多シトス罪人ハ捕縛セシヨリ檢事ニ交付スルノ時限ハ二十四時ノ制規ナリ

疑問第四十五條

輓近九年間在牢時間ハ平均シテ幾程ナルカ

兵庫

東京府視察官

明治六年ヨリ八年迄ノ平均

懲役百九十二日

囚獄三十二日

大坂

輓近九年間所刑平均急速調ナリ難シ明治六七八三ヶ年平均一ヶ年一千余人

東京

明治元年ヨリ九年迄ノ平均懲役三百六十一日余

疑問第四十六條

死刑ニ擬定スルキヨリ斷罪ニ至ル時間大約幾多ナル

歟

兵庫

大凡四十日計

大坂

死刑ニ處スル者ハ申渡後即時ニ刑ニ處ス

東京

裁判官ニアラザレバ答ヒカタシ

疑問第四十七條

輓近九年間處斷ヲ受クル后生存スル者平均幾子ナルカ

兵庫

詳カナラス

大坂

裁判官ノ所分ニテ答ヘ成リ難シ

東京

明治元年ヨリ九年迄終身ノ刑ヲ受クルモノ二百零三

人

疑問第四十八條

輒近九年間死罪ニ處セラレタル者平均幾千ナル歟
兵庫

明治四年ヨリ八年迄

九十九人平均一ケ年十九人

大坂

第四十五條答同シ平均一ケ年ニ廿二名ナリ

東京

明治元年ヨリ九年迄死刑ヲ受ケルモノ自裁三人

絞罪百廿三人 斬罪九百四十七人 梟首百七十四人

磔罪三人 總計千二百五十八人内男千二百四十人

女十八人

疑問第四十九條

永ク禁錮スル罪人ハ他ノ犯人ト待遇ニ於テ異ナル所
ナキカ

兵庫

他ノ犯人ト區別スルナシ

大坂

罪人繫獄ノ長短ニ因リ待遇ノ別ナシ

東京

永禁錮トハ即今ノ禁獄ナルヤ果シテ然ラバ他ノ罪囚
トハ全ク所遇ヲ異ニス其所謂使役ヲ命セズ獄衣ヲ着
セズ其他ノ待遇ハ總テ寛ナリ

疑問第五十條

死刑ニ處セラレ、罪人ハ他犯人ト同一ノ待遇ヲ受ケ

又其斷決ノ後チ暫時禁止セラル、間同一規則ヲ守ラ
シムルカ

兵庫

區別ナシ

大坂

第四十六條答書ノ如シ

東京

死刑ニ處セラル、罪人ハ佗犯人ト所遇異ナルナシ又
タ已決スルヤ直チニ別ヲ行フ

疑問第五十一條

負債ノ為ニ禁獄セラル者アルカ然レハ其情理ヲ斟酌
シテ審判スルカ

兵庫

負債ノ為メ禁獄セラル、コナシ

大坂

負債ノ為メ禁獄ノ有無ハ裁判官ノ所分ナリ

東京

負債ノ為メ禁獄セラル、者ナシ

疑問第五十二條

負債人獄ニ繋ルトキ佗ノ犯人ト同等ノ處置ヲ受クル
歟

兵庫

前條ヲ參觀スヘシ

大坂

第五十一條答書ノ如シ

東京

前條ニ由テ明知スベシ

疑問第五十三條

輕罪ニ由テ屢々獄ニ繋ル、若是レカ爲ニ到底好果ヲ結フ歟

兵庫

好果ヲ結ハス

大坂

輕罪ニ由テ屢々獄ニ繋ル若是レカ爲ニ到底好果ヲ結フ者ノ有無其事實分リ難シ

東京

好果ヲ結フノ有無ハ事實徴シ難ク及ツテ重罪者ノ刑期永キ者ニアリ

疑問第五十四條

再犯ノ者員數幾于ナルカ

兵庫

明治九年一月現在

百四十六人内 百人 懲役 四十人 囚徒

大坂

再犯ノ者凡六分ノ一ナリ

東京

明治九年一月一日ヨリ同十二月三十一日迄入監スル者二千九百八十五人内再犯五十三人三犯百八十四人四犯十八人其餘ハ悉ナ初犯ナリ

疑問第五十五條

再犯ノ者初犯ニ比スレハ更ニ嚴科ニ處セラルハ歟

兵庫

更ニ嚴科ニ處セラレ

大坂

犯罪ノ者罪科ニ處スルハ裁判官ノ職分ナリ

東京

再犯ハ初犯ニ比スレハ更ニ嚴科ニ處ス我法律ニ加等罪ト稱シ盜犯及博奕ノ罪ヲ犯ス者ニ限り再犯ハ一等ヲ加フ

疑問第五十六條

牢獄及ヒ囚人ヲ清淨ニ整備スル爲メニ何法ヲ設ケラ
ルカ沐浴ハ一月幾回爲シ得ル歟

兵庫

日々掃除スル法トス懲役ハ日々浴ス余囚ハ月ニ六度

大坂

未決囚人獄室内ハ輪番毎朝掃除ス一房ノ頭ヨリ之ヲ
命ス沐浴ハ冬ハ一ヶ月ニ六度夏ハ十二度ナリ

東京

囚人ノ中身體軟弱又ハ老年ニシテ強役ニ堪ハサルモ
ノヲ撰ビテ毎日獄内ヲ洒掃セシム沐浴ハ冬夏ノ別ナ
ク毎日ニ一度ツ、浴セシム

疑問第五十七條

囚人毎ニ日幾量ノ水ヲ飲用及煮炊ニ給スルカ食物ハ
幾量ヲ與ヘ就中肉類魚類野菜各幾分ナルカ

兵庫

水ハ適宜ニ給ス食ハ明治八年太政官第八號公達ニ照
準ス

大坂

大 囚人毎ニ飲用ノ水湯ハ適宜ニ給ス食物ハ未決囚一日
ニ白米四合牛肉魚肉菜蔬トモ適宜ニ給ス

東京 飲水ハ各監内ニ貯置キ自由ニ之ヲ用ヘシム飲食ノ給
與ハ明治八年太政官第八号達ノ通り

疑問第五十八條

囚人常ニ幾容ノ大氣立方流入セシムルカ

兵庫

未夕之ヲ量ルノ法ナシ

大坂

人員増減ニ因リ大氣ノ分量測リ難シ

東京

未詳

疑問第五十九條

牢内氣通宜シキヲ得ルカ

兵庫

通氣宜シ

大坂

牢内氣通宜シキヲ得ルナリ

東京

通氣宜シ

疑問第六十條

牢獄溫暖ノ設ケアリヤ然レハ如何シテ備フヤ

兵庫

溫暖ノ設ナシ

大坂

極寒中ニ病人并ニ老幼ノ者ノミ湯婆ヲ給ス外ニ温煖ノ設ケナシ

東京

每檻ニ温火ヲ内ルハヲ許ス

疑問第六十一條

牢内放尿ノ設置シキヤ

兵庫

可ナリ

大坂

放尿ノ設置シキナリ

東京

放尿ハ一檻ニ一ヶ所ノ便所ニ於テス

疑問第六十二條

牢内燈火ノ設ケアルヤ然ラハ如何シテ備フヤ

兵庫

牢内掛燈アリ種油ヲ用エ牢外ニランプヲ點シ石腦油ヲ用ユ

大坂

燈火ノ設ナシ

東京

點火ノ設ケアリ日本製ノ行燈ヲ用ユ

疑問第六十三條

便所ノ設置如何

兵庫

獄内ニ其所ヲ設ケ管中ヲ流レテ外ニ出シム

大坂

一房毎片隅ニ穴ヲ明ケ常ニ蓋ヲ以テ覆フ事毎トニ水ヲ以テ溝ヨリ柵外ニ流通セシメ臭氣ノナキヲ要ス

東京 第六十一條ノ通

疑問第六十四條

各時ニ於テハ囚人毎トニ幾領ノ被褥ヲ與フカ一枚ノ目量幾斤ニシテ而メ幾回洗濯スルカ又衣服ハ毎月幾回更換スルカ

兵庫

蒲團二人ニ付一枚ヲ給與シ衣服洗濯等ハ定限ナシ親族ヨリ給與ヲ乞フ者ハ許ス

大坂

私物ヲ適宜ニ用ユルヲ許ス所持セサルモノハ蒲團一

枚ヲ給ス目方ノ定ナシ洗濯更換ハ適宜度数ノ定メナシ

東京

衣服及ヒ被褥ヲ與ルノ方モ明治八年太政官第八号達之通り

但洗濯ハ時々コレヲ為ス

疑問第六十五條

使役眠寢及ヒ暢意ノ時間幾多ナルカ其他獄中諸則ノ如キモ一々詳細ニ說示セラレヨ

兵庫

在獄ノ者ハ一日一時間ツ、運動ヲ許ス獄中規則未定

大坂

使役ノ設ナシ

東京

使役ハ八時間ヲ以テ制規トナス然レ氏日ノ長短及炎
燭ノ節ニ依リテ適宜伸縮ス午飯後一時間ハ放役暢意
セシム閉扉後起床マデ十時間或ハ（二日依ル長短）十二時間
ヲ眠寐ノ時トス然レ氏午後十時迄ハ書籍ヲ朗誦シ筆
算ヲ學習スルノ自由ヲ聽ルス

疑問第六十六條

牢内毎子ニ患フル所ノ病疾ハ何症ナルカ

兵庫

第一疥癬 第二口内炎 第三冒弱 第四感冒下痢

大坂

人ニ因リ病疾異ナリ患ル所ノ病名分テ難シ

東京

明治九年十二月ヨリ同十年十一月迄一ケ年間ノ患者
表ニ據レハ第一消化機系統諸病ニ罹ル者多シ之ニ次
テ多キハ感冒症ナリ

疑問第六十七條

病者ノ比例大約幾多ナルカ冬天又夏時ニ就キ各別ニ
説示セヨ

兵庫

百人ニ付冬天四十名夏時五十五名

大坂

八年中服藥スル者五百名余アリト雖トモ重患稀レニ
シテ皆輕患者ノニ譬ハ昨夕休藥シ又本日服藥スル者
ノ類五度アレハ五名ニ數ヲ多クシテ

東京

病因死囚ノ比例八一昨明治八年十二月廿一日ヨリ全
九年一月ニ越ス所ノ在檻囚徒千七百四十一人同九年
一月一日ヨリ同十二月三十日迄入檻スル者二千九百
八十五人合セテ四千七百二十六人此ノ内病ニ罹リ美
用スルモノ千八百六十四人(一ヶ月月ニ割テハ百五
十五人三ト割テハ百五)
疑問第六十八條
死七ノ比例大約幾于十ルカ

兵庫

明治八年中二十二人

大坂

昨明治八年中繫獄人員一千四百五十三名ノ内死七一
名ナリ

東京

前條ノ通リ患者千八百六十四人ノ内牢死スル者百十
八人(一ヶ月ハ割ルハ)

疑問第六十九條

囚人ノ死體如何所分スルカ但牢中病ヲ死セ死體埋填
ニ罪囚ノ病ヲ死セ死體埋填
前ニ其葬式ヲ行フカ然ルトキハ何レノ場所ニ埋メ且
如何様ノ仕方ヲ以テ執行セラル、カ囚人ノ墓所設ケ
アルカ若シ然ラハ所刑濟ノ死體同様ニ埋填スルカ否
ラサレバ如何所分スルカ囚人ノ墓所ニ碑石或ハ碑標
ヲ設ケラレルカ

兵庫

親族ニ下付ス無籍ニシテ親戚ナキ者ハ官ニテ埋葬ス
官ヨリ埋葬スル者ハ葬式ヲ行ハスハ部郡御崎村外墓
ト唱アル所ハ埋メ屍ハ棺桶ハ納メ埋葬ス前條見合ス

へし「差異」ナシト雖トモ獨リ處刑ノ者不解剖願出ル者
アラハ下付スルノ違アリ前條見合スヘク官ニテ埋葬
ノモノハ木標ヲ立ツル

大坂

獄中ニ於テ病死スル囚人ノ死體ハ埋葬地柵外ニ之ヲ
埋ムト雖トモ其親戚包フ者アレハ之ヲ與フ者ナ
ケレハ已決者ハ官醫ハ解剖ヲ聽ス埋葬前ニ葬禮ヲ行
フナシ「死刑」ニ處セラレタル者ノ死體埋葬地ト別
ニ設ケ「葬」病死セシ囚人ノ墳上ニ標木ヲ建設ス
東京
毎日二度医員回診シ每室ニ看護者ヲ置ヒテ整切ニ傳
待セシム食物ハ医員ノ需ニ應ズ「医員」ハ警視局御雇教
師獨逸國大博士ウ井ルヘルムデーニツク氏ノ傳習黨派

ニシテ總テ同氏ノ療則並ニ藥劑則ニ根基ス

監獄病院副長村上貞正曰ク曾テデーニツク氏ニ聞ケ
ル「アリ」獨逸國囚獄場ニ於テ囚人ニ與フル食料ハ左
ノソツブヲ通例トス

澱粉 二匁 牛酪 五錢

塩 四錢

右煮テソツブトシテ與フ

疑問第七十條

牢内疾患アレハ如何之ヲ處分スルカ醫員ノ種類ハ如
何其所割西洋法ヲ用ニルカ又支那法歟

大坂

疾患アレハ病間へ移シ囚人ノ内ヲ人撰シテ一名或ハ
二名ヲ以テ看病セシム病症ニヨリ常食外醫ノ言ニ因

テ滋養食物ヲ給ス醫ハ西洋法ヲ心得タル者ヲ採用シ
テ其所創西洋法ヲ用ニ

東京

罪人年以ノ者ハ第一条ニ陳フル如ク別檻ニ區畫シ正

午十二時ニ工役ヲ終ラシメ檻内ニ於テ教師囚人中學

又ハ他ハレモアリ備ニ就キ讀書筆算善教ヲ學シハ毎月一

度獄司之試験シ階級ヲ分ツテ賞ヲ與フ

疑問第七十一條

年以罪ヲ犯ス者ノ爲メニ飯善ノ教或ハ技藝ノ學アル

カ又此ノ罪人ハ尋常ノ監獄中ニ囚繫スルカ

兵庫

年以ノ者尋常ノ通

大坂

飯善ノ教技藝ノ學ナシ如クノ監獄ハ之ヲ區分ス

東京

全備スト云カタシ

疑問第七十二條

獄則ハ以テ全備スト爲スカ欠典アリト爲スカ又何ノ

變革アルヲ要セラル、カ具サニ説示セヨ

兵庫

方今ノ時勢ニ相當スル者トス此ノ上ハ時勢ノ進歩ニ

從テ漸次改正アラシムヲ欲ス

大坂

牢獄ハ全備スト云ヒ難シ將來ノ變更豫シメ定メカタ

東京

以上件々ノ外カニ囚人ヲ責付保管セシムルノ方法アリ假令バ囚人彼限内ニ於テ重病ニ罹ル者アレハ醫員ノ診断證明ヲ以テ其親戚へ責付シテ療養セシム若シ全瘉ニ至ルハ再ヒ獄場ニ入レテ餘役ヲ償ハシム其親戚ノ者ハ本犯ノ保管中ハ医員ノ診断書ヲ以テ一周間毎ニ獄署ニ届ケ若シ本犯責付中ニ死亡スルハ其罪ヲ許ルス

疑問第七十三條

以上件々ニ關係セス牢獄ノ處置ニ付キ緊要ノ事件アレハ請フ別ニ逐一詳示アラシムヲ

兵庫

右件々ノ外ニハ智識増加シテ費用ノ減収セシムヲ要ス

大坂

牢獄ノ處置ニ付キ緊要ノ事件右ニテ大概遺漏ナシ總テ答ハ未決囚ノ所置ナリ已決囚ハ不載

Blank manuscript page with red vertical lines and a red border. Faint red text is visible on the left side of the page, including the characters "不" and "不".



